

# 宗教教育についての一考察

—— トランスパーソナル心理学の立場から (II) ——

村 島 義 彦

岡山理科大学理学部

(1995年9月30日 受理)

## C) 宗教的現象をいかに救い出すか

### 1) 現行の意識の構造図への見直し

さて、「宗教をどう捉えるか」を論じた先の箇所(〈2〉のA))の終了部で、わたしは、宗教教育の担うべきとりわけ重要な課題のひとつとして、「こうした宗教的体験が単なる錯覚や妄想の類いではなく、われわれの意識の構造図の内に、日常意識と並んだ正当な位置を確固として占める点を納得させるに足る、何らかの心理学的枠組みを提示する」作業の必要性を前もって訴えておいた。この約束を果たすべく、ここでは、トランスパーソナル心理学の代表的論客として活躍するK.ウィルバーの「意識のスペクトル」を紹介してみたい。

### ① トランスパーソナル心理学

A.マズローは、今日の心理学の全域をざっと見渡した上で、それを大きく3つに区分した。すなわち、精神分析に代表されるフロイドの心理学を奉じる「第1勢力」と、動物実験に依拠した行動主義心理学を奉じる「第2勢力」と、人間ならではの価値や意味の問題に焦点を絞った、かれ自らの唱導する「第3勢力」としての人間性心理学である。マズローの心理学は、ある場合には、対象とする“人間ならではの”領域に着目して「人間性心理学」と呼ばれ、ある場合には、心の“HAVEの側面”によりは“BEの側面”に焦点づけて論じられる点から「存在の心理学」と呼ばれ、ある場合には、欲求ヒエラルキーの上位段階に位置する“自己実現の欲求”の描き出しに主たるエネルギーの注がれる点から「自己実現の心理学」とも呼ばれている<sup>1)</sup>。

マズローは、各種の精神的疾患に悩む患者たちに的を絞った「第1勢力」の心理研究からは漏れ落ちざるをえず、さらには、動物実験などに訴えた「第2勢力」の心理研究からも同様に漏れ落ちざるをえない、価値や意味の問題と深く絡まり合った“人間ならではの心理”を研究するには、まずもってその対象を、従来のような患者や動物から(さらには普通の一般人から)、各分野でリーダー的役割を演じる“第1級の人たち”に絞り替える必要があると強く訴える。人間の心の全域を隈なく探索しようとするれば、無意識をも含めた心の暗

部は「第1勢力」で、動物とも共有される心の下部(=生理的次元)は「第2勢力」でそれぞれカバーされるにしても、心の上部については他方、これと深く関わって生きる(あるいは生きた)当人に問わなければ、どうした内実と広がりをもつかはおおよそ測りがたい。たとえば、人間の肉体的限界を測るには、一般人の平均的記録よりは、オリンピックなどで達成された各種目の最高記録が参考にされるように、心の限界を測る場合にも、学問・芸術・政治・教育・軍事・宗教・経済・スポーツなどの第一線でパイオニアとして活躍する(あるいは活躍した)人たちの報告する“心の体験”に耳を傾ける他はない。こうした傾聴の結果、生理的欲求・生存の欲求・所属の欲求・承認の欲求といった順にヒエラルキーをなす「欠乏欲求群」に加えて、自己実現の欲求というやや異質の「成長欲求」の存在が確認されたし、さらには、自/他の区分を基盤とした日常体験とはあくまでも異なる、この区分の揺らぎないし解消を基盤とした「至高体験(peak experience)」の存在も確認されることになった。

ところで、上にみた至高体験は、自/他の区分の揺らぎないし解消を基盤としたものである以上、一方では自己実現の領域にいく分は足場を残しつつも、その足は他方で、自己超越の領域に大きく踏み出されてもいる。そして、人間性心理学からバトンを受け継いで、自己実現の彼方に広がる自己超越の地平に雄々しく駒を進めたのが、他でもない「第4勢力」としてのトランスパーソナル心理学であった。

この心理学は、「トランス・パーソナル(個我を超えた)」という名も語るように、自/他の区分を前提としたパーソナルな次元での日常意識よりは、この区分の揺らぎないし解消を伴ったトランスパーソナルな次元での超常意識(“宗教的体験”も大きくはここに含まれる)を主たる研究の領域とする。そこではだから、スポーツの最先端で、ドラッグの現場で、各種セラピーの実践の場で、瞑想等の霊的トレーニングの中でそれぞれに観察される“トランスパーソナルな現象”の数々が収集され、分析され、吟味されるとともに、そうした現象群を無理なく整理づけた上で、日常のパーソナルな現象群をもそこに加え入れて、さらに全体的な現象図を形造る基本的枠組みが当然に構想されていなくてはならない。この枠組みを欠くなら、トランスパーソナル心理学は、単なる論のレベルに留まっておおよそ学の名に値しないからである。この心理学はそして、こうした枠組みの代表例を2つばかり所持している。S.グロフの「意識の作図学」とK.ウィルバーの「意識のスペクトル」である<sup>2)</sup>。ここではしかし、枠組みとしてのまとまり具合とスケールを勘案して、臨床性には欠けるものの、後者の「意識のスペクトル」を紹介してみたい。

## ② 意識のスペクトル

ウィルバーは、人間の意識を光学的概念であるスペクトルになぞらえて、これを大きく「プレ・パーソナル」「パーソナル」「トランス・パーソナル」の3層に区分する。これら3層は、個体発生のレベルでは誕生から成人にいたる各人の意識発達のコースに、また系

統発生のレベルでは直立猿人から現代人にいたる人類の意識発達のコースに、ほぼこのままの順序で位置づけられてもいる<sup>3)</sup>。

今、個体発生を例にとるなら、生まれたばかりの赤ん坊は、自分と自分以外のもの一般の区別も定かでない、自他一体の意識的なまどろみの内にある。このまどろみは、時間の経過とともに、自他一体から自/他の区分の感得に向かうのであるが、そこにもむろん、より細かな段階的区分が認められるといわなくてはならない。幼時初期に代表される、意識がまだ朦朧として物質とのカオスを抜け出る以前の無意識の融合段階（第1の「物質」の段階）、そこから一步を進めた地点にある、見る・聞く・嗅ぐ・触る・味わうといった感覚運動にのみ導かれた、犬・猫・ネズミ等の動物の意識に類比される「快感原則」に支配された段階（第2の「身体」の段階）、さらに一步を進めた地点にある、内/外、主/客、部分/全体といった区分自体がいまだに曖昧なため、マジック等に代表される“論理ならぬ論理”のまかり通る精神の段階（第3の「魔術」の段階）、そのまた一步を進めた地点にある、魔術と論理が未分化なままに混在した、今日の神話一般に代表される類いの精神の段階（第4の「神話」の段階）である。

以上の4つは、ともに自/他の区分を十全に感得する以前の状態という意味で「プレ・パーソナル」と命名される。各人はしかし、時間の経過とともにこうしたプレの状態を通過して、一般には、自/他の区分を正しく感得できる状態にいたり着く。この状態は、自/他の区分に着目して「パーソナル」と命名される。ここでは、魔術と論理の未分化も解消され、合理的思考を中心とした「現実原則」の支配する精神の世界が展開される。これはだから、別名として第5の「合理」の段階とも呼ばれている。この段階のさらに上には、われわれのアイデンティティが拡大し、心的な領域に加えて身体的な領域をもその内に含む結果、自己として意識される範囲が有機体の全体にまで及び、心身の一如性が強く実感される第6の「身心」の段階（あるいは「ケンタウロス」の段階）が位置する。パーソナルと呼ばれるのは、以上の2つである。

さて、「プレ・パーソナル」から「パーソナル」への意識発達については、個体発生のレベルでわれわれ自身がほぼ例外なく体験するとともに、数多くの研究がこれまでに重ねられてきたこともあって、あえて説明をくり返す必要はないだろう。われわれの日常体験と相互依存の関係にある日常意識はすべて、こうした意識発達の行程中に含まれる。とはいえ、意識発達そのものはこの時点で終止するわけではない。それは、基本的には「プレ・パーソナル」から「パーソナル」を経て「トランス・パーソナル」にまで進んでいく。トランスパーソナル心理学で中心的に扱われる超常体験と相互依存の関係にある超常意識はすべて、この行程中に含まれるのである。

アイデンティティが自己の全体（つまりは身心の領域＝心的領域＋身体的領域）を越えて拡大を遂げると、ついには自/他の境界そのものが揺らぎ始めて、こうした区分を越えたトランスパーソナルな世界が登場する。その最初に位置するのは、透視、透聴、予言、テ

レパシーといった数々の ESP ないし霊現象一般が体験される段階（第7の「霊」の段階）であり、次いで、ユングの説く元型等の体験される段階（第8の「微細」の段階）が続き、さらには、仏教にいう空体験に彩られた段階（第9の「元因」の段階）がこれに続くというウィルバーは指摘する。これらはまとめて「トランスパーソナルな帯域群」と呼ばれている。

だが、われわれの意識発達のコースはこれで終点というわけではない。こうした帯域群をさらに抜け出たところに、究極の“段階ならぬ段階”としての「統一意識」が位置するからである。ともあれ、トランスパーソナルな世界一般のこうした細分は、座禅を介したウィルバー当人の瞑想体験に基本的には依拠しつつ、超常現象として報告された各種のデータ群を無理なく整理づける論理的な努力の中で獲得された一種の仮説的図式であった。この仮説的図式のメリットは、合計9つの（あるいは「統一意識」を含めて10の）段階をもった意識の発達コースを想定することにより、日常意識に加えて数々の超常意識をも含み込んだ意識現象の全体を、まさに意識現象として漏れなく掬い取りうる点にある。意識現象の全体を研究の俎上にあげるには、それに先立ってまず、これらへの漏れのない“現象としての掬い取り”が図られなくてはならないからである。そうした研究が今後いかなる答えを導き出すにせよ、超常意識一般が、あくまでも意識現象として“研究の俎上にのぼる”権利を獲得する意味は、それすら無かったこれまでの惨めさを考えるなら、断じて過小評価されてはならないだろう。

なお、上に紹介した意識発達の9レベルを簡単に図示すると、以下のようになる<sup>9)</sup>。

(1) 物質のレベル	}	プレパーソナルの段階
(2) 身体のレベル		
(3) 魔術のレベル		
(4) 神話のレベル		
(5) 合理のレベル	}	パーソナルの段階
(6) 身心のレベル		
(7) 霊のレベル	}	トランスパーソナルの段階
(8) 微細のレベル		
(9) 元因のレベル		
(統一意識)		

### ③ 「ケンタウロス」「トランスパーソナルな帯域群」「統一意識」

ちなみに、「意識のスペクトル」に登場した耳慣れぬ「ケンタウロス」「トランスパーソナルな帯域群」「統一意識」の3者について、これらの内にある人間が現実を抱く内容的実感に的をしぼって簡単に記述すると、およそ以下のようになる<sup>9)</sup>。

まず、「ケンタウロス」についてはこう報告されている。——このレベルの人間は、没頭の状態ないし絶好調の時点で日常にも味わわれる、心身の徹底して一体化した全有機体意

識としての“ケンタウロス”の内にあるため、次の4つの状態的特質をもつ。すなわち、

- 第1に：心身のギアが完全に噛み合った状態に特有の、緊張のほぐれた豊かなリラックスと深い自由感を享受すること、
- 第2に：今のこの瞬間に充足を見い出して生きるため、未来と過去への拘泥による数々の“取り越し苦労”や“持ち越し苦労”から自らを解き放って、今という瞬間にロスなくエネルギーを投入できること、
- 第3に：耐え難いものの最右翼に位置すると思われる、自己の意味・存在の意味への拭いがたい不信と迷いを中心とした内的アナーキーを超えて、自らの意味あること・存在の意味あることがおのずと感得されること、
- 第4に：このレベルではしかし、心身統一的自己/外的環境一般(あるいは主体/客体)の境界、生/死(あるいは存在/無)の境界はいまだに取り払われず、各人はあくまでも個我の段階に留まるため、実存主義にいう「他者への恐れ」と「死なないし無への恐れ」は依然として残存すること

である。

ところで、「大いなる自由感」「今への集中」「意味の確信」「他者と無への恐れ」をおのれの属性としてもつケンタウロス的人間は、瞑想等の霊的トレーニングを介して、主体/客体(あるいは内/外)の境界的ゆらぎと解消に触れる中で、個我のレベルから超個のレベルに足を踏み入れていく。このレベルは、超越の度合に応じて、「トランスパーソナルな帯域群」と「統一意識」の2層に区分される。そして、個我から超個への関門を通過した人間の前に広がる「トランスパーソナルな帯域群」は、「帯域群(bands)」という名も示すように、それ自体がさらに、予知、念動、透視、透聴、幽体離脱等のESP体験の世界である「霊のレベル」、ユング的な元型体験の世界である「微細のレベル」、仏教にいう空ないし無を体験する「元因のレベル」といった3層に細分されるのであるが、こうした帯域群の中で実感される内容については、こう報告されている。——このレベルの人間にあっては、自らの思考・欲求・性格・感情といった、およそ主体と同一視される傾向の強い内的なもの一般から、そうした思考・欲求・性格・感情をまさに自己の思考・自己の欲求・自己の性格・自己の感情として所有する当の主体である「超越的自己(自己そのもの)」が分離されて、内的なものは、外的なものと同じく広く客体の内に数え入れられる結果、内的なもの一般からの脱同一化が可能となって、次の4つの状態的特質が確認される。すなわち、

- 第1に：内的なものを外的なものと同様、自己に疎遠なものと感じて粗略に扱う“内の外化”とは逆に、外的なものを内的なものと同様、自己に親近なものと感じて親身に扱う“外の内化”がおのずから実現されること、
- 第2に：あらゆる客体からの脱同一化を経て、主体は、いかなる客体にも執わ

れず、こだわらず、偏らない自在さを得て、真の意味での主人性が確立されること、

第3に：絶えざる変転の内にある客体を超越し、これらを“もちもの”として用立てる当の主体は、それ自体、変転を免れた不変かつ不死の存在であることが直接に感得されること、

第4に：こうしたレベルもしかし、あらゆる出来事をまさに出来事として観照する超越的自己が、日常次元の個的自己と同等の存在感はもたないにせよあくまでもそこに確在して、主客の合一した完全な無境界はいまだ実現をみていない結果、究極のゴールとは到底みなしがたいこと

である。

さて、「あらゆる客体への親和感ないし親近感」「完全な主人性の確立」「自己の不死性の感得」「超越的自己の残存による主客合一の最終的不全」をその属性にもつこれら帯域的人間は、超越的目撃の段階から目撃そのものの解消に向けて、最後の関門ともいうべき「統一意識のパラドックス」を突破しなければならない。ここにいう「統一意識のパラドックス」とは、主客の合一した無境界の意識的な側面に他ならない統一意識の希求が、それ自体、希求する主体を必然的に前提し、それゆえ、主客の溝の取り払いを（つまりは統一意識を）拒まざるを得ないこと、けれども他方、希求しなければ当然に至ることも適わないといった厄介至極なアポリアを指す。得ようと努めればかえって得ることがかなわず、努めなければ元のままに留まるといったこの種のパラドックスは、ところで、禅仏教にいう「本証妙修」——霊的な修行（ここでの「妙修」）は本来の悟り（ここでの「本証」）にいたる道としてあるのではなく、「妙修」自体が実はそのまま「本証」でもあること——を真に体得することによって、当のパラドックス性を打ち砕くことが可能となる。「本証妙修」の体得は、同時に、主体である自己の完全な「明け渡し」でもあるからである。「水を求めて体験の波を次々と渡り歩く」<sup>6)</sup>といったあり方、あるいは、「湿りを次の体験の波に求めて、常に現在の波を見逃してしまう」<sup>7)</sup>あり方から、求める自己を明け渡して、求めるといふ「次」を期待して「今とここ」を逸れる姿勢を消し去る時、おのずから「今とここ」のみが現出して、それが、実は統一意識に他ならない。純粹な「今とここ」には、いかなる時空の広がりもなく、それゆえ、自己/他者の境界も、生/死の境界もむろんない。当然に、他者への怖れも、死ないし無への怖れもありえない。ケンタウロス的人間に残された克服すべき課題としての2つの恐怖、帯域的人間にみられた自己超越の不全は、統一意識のレベルにおいて、はじめて完全に克服されるのである。道教の大家である荘子は、だから、タオ的な一如の世界にいたった統一意識的人間をこう形容している、「かれは、自らの心を鏡として用立てる。その心は何ものも把まない。何ものも拒まない。すべてを受け容れつつ何ら保持しない」<sup>8)</sup>と。

## 2) 宗教的世界に触れるポピュラーなメソッドは

ここでは、宗教教育の担うべきとりわけ重要な課題の今ひとつとして〈2〉のA)の終了部に挙げた、「当の宗教的体験への接近を図る比較的穏当でかつ科学的なメソッドを具体的にいくつか提示する」という作業に従事しようと思う。その際に注目されてよいのは、ウィルバーと並ぶトランスパーソナル心理学の今ひとりの重鎮であるグロフの手で開発された「ブリージング・セラピー」であろう。

### ① ブリージング・セラピー

トランスパーソナル心理学における臨床面でのメソッドを代表するグロフの「ブリージング・セラピー」は、「深くて早い呼吸（ハイパー・ベンチレーション）」と「喚起的な音楽」と「一連のボディワーク」の効果的な組み合わせからなる。このセラピーは、向精神性薬物としてのLSDを用いた自らのラディカル・セラピーに、効果の点ではほぼ十分に取って代わる力を備えた代替セラピーとして、グロフの手で完成されたものであった。ブリージング・セラピーに先立つLSDセラピーの実践期間をも加え入れると、およそ30年強にもおよぶ臨床の場での非日常的な体験群の観察を介して、グロフは、こうした体験群を無理なく説明づけるに足る意識の全体図（かれはこれを「意識の作図学」と命名した）と、セラピーの過程にはたらく癒しの力学を、ウィルバーとはいささか趣を異にする形で独特に描き出している。

そうしたグロフのブリージング・セラピーを、「意識の作図学」や癒しの力学ともからませつつ、以下に簡単に紹介してみよう。

さて、ブリージング・セラピーは、一般には、20名前後のグループで実施される。会場には、かなりの広さをもち、十分に防音された、床の柔らかな、落ち着いた雰囲気をもつ、薄暗い部屋が選ばれて、セラピーは、原則として男女のペアで実施される。クライアント（セラピーの実践者たち）は、各自の直感に訴えて選び合ったパートナーと相談し、まず、最初のセッションにおける「ブリーザー（ブリージングの実践者）」と「シッター（その見守り役）」を決定しなければならない。これが決まると、一応の前準備は完了したことになる。

次いで、会場が薄暗くされ、ブリーザーは目を閉じて、静かに床に横たわる。中央に立つセラピストのイメージ誘導に従って、かれは、心身をリラックスの状態に導いて、意識の深みに向かうこれからの冒険への心の準備を静かに整える。突如として、激しいリズムの音楽が会場全体に響きわたる。それに合わせて、かれは、精一杯に「速くて深い呼吸」を絶え間なくくり返さなくてはならない。10分近くたつと、まず手足がしびれ始め、さらにこの呼吸を続けると、手足、指先、腕、首、肩などの部位が耐えがたい程に痛みはじめる。医学的には「カーポペダル痙攣」と呼ばれるこの種の痛みやしびれは、しかし、呼吸の継続とともにしだいに和らぎに向かう。ブリーザー自身は、この段階において、さまざま

まな感情——怒り・攻撃性・不安・憂うつ・敗北感・悲しみ・罪の意識等——の激発を体験する。痙攣を介して抑圧が解除され、内に固く封じ込められていたトラウマ的感情が一気に踊り出てくるからである。ブリーザーの中には、癲癇の発作に近い過度のアクションを展開する者もいる。こうした噴出はしかし、抑えることなく当の噴出にわが身を任せ切っていると、おのずと鎮まってしまう。そして、この種の「噴出一身の委ね—鎮まり」がくり返される中で、内なる感情が存分に放出された時、噴出そのものもしだいに衰微する。音楽の方も穏やかな曲目が変わり、その中でブリーザーは、豊かなくつろぎの波にわが身を任せる。

およそ2時間半に及ぶセッションは、こうして終わりを告げる。だが、ブリーザーの中には、いやな不快感や緊張を各部位に残した者もいないわけではない。この場合にセラピストは、「集中的なボディワーク」をさらに欲するか否かをブリーザーに問い、求めに応じて、あるいはこれを付け加える。この際のボディワークの狙いは、外的介入によって当の緊張をさらに高めることにある。頭痛や首の痛みに対しては、その痛みを際立たせる姿勢や筋肉の緊張が故意に図られる。問題を訴える身体部位の緊張の強化は、その部位と深く結びついたトラウマを刺激し、刺激されたトラウマは、さまざまな感情の激発という形で、封じ込められたエネルギーを放出しておのずと癒されていくからである。

次いで、ブリーザーとシッターが交替して、同じセッションが再びくり返される。ペアの双方がセッションを終えると、一般には、「マンダラ・ドローイング」が課される。大きな円を印刷した白紙と1箱のクレヨンが配られ、各人は、自らの得た体験内容を、言葉ではなく絵で表現しなくてはならない。ドローイングが終了すると、小グループに分かれて、グループ単位で描かれた「マンダラ」への解釈が試みられる。これを介して、得られた体験の共有と深層レベルでのコミュニケーションの促進を図るわけである。

以上のセッションを成功裡に終わらせる上でとりわけ重要なのは、開始に先立ってセラピストの施す、ブリーザー自身が当然に味わうであろう非日常的な体験内容への大まかな説明（つまりは、それらを無理なく説明づける枠組みとしての「意識の作図学」の提示）と、そうした体験も、ここでは恥じる必要なくそのままに受け容れられるのだといった場の雰囲気醸成であろう。体験への内的なレディネス（受け入れ準備）と外的な場の整備を欠く時、ブリージングの生命ともいうべき体験の完遂は、体験自体が非日常的なものであるだけに、ほぼ不可能に近くなるからである。これら2点に支えられて、ブリーザーは、一連のセッションを終点まで辿って自分なりの体験を得る。シッターも他方、ペアの演じる光景を介して、プロセスの全体を見渡すことができるとともに、周囲に繰り広げられる諸種の光景を目にする中で、さまざまな生きたケースに触れることが可能となる。プロセスを主体的に体験するとともに、当のプロセスを客観的に観察もするという2点は、セラピーでの体験の非日常性に素直かつ自然に反応していく上で、まず第1にクリアすべき必須の要件でもある。

## ② 意識の作図学

上にみた「ブリージング」を実践したブリーザーの報告する非日常的な体験内容は、グロフによって「意識の作図学」という形に整理されている。この作図学によると、人間の深層体験は大きく、「感覚的障壁の領域」「回顧的・自伝的な体験領域」「分娩前後の体験領域」「トランスパーソナルな体験領域」に4分される。フィゴのような過呼吸を通して感覚器官が活性化され、視覚を中心として感覚全体が鋭敏になると、外界の拡大や縮小、ねじれ、極彩化等が体験される。上で「感覚的障壁の領域」と名付けられたのは、この体験領域を指す。これはしかし、「無意識の魂への旅が開始される前に通過しなければならぬ感覚的な障壁」<sup>2)</sup>にすぎず、それゆえ、「審美的に喜ばしいものではあっても、自己理解の高まりにつながることはありえない」<sup>3)</sup>のが一般である。

ここを通過すると、クライアントは一般に、フロイトの説く個人的無意識に相当する「回顧的・自伝的な体験領域」に足を踏み入れる。この領域では、各人に刻み込まれた過去のトラウマ的記憶が、無意識の深みから次々と浮かび上がってくる。グロフは、このトラウマ的記憶を臨床的に観察し、フロイトとは異なる以下の3点をとりわけ強く指摘した。すなわち、

- (1) この種のトラウマの大半が、“心のトラウマ”よりはむしろ、生命にかかわる病気やケガ、さらには手術等の苦痛や恐怖に基づく“身体のトラウマ”から構成されること、
- (2) その記憶はしかも、感情・イメージ・身体感覚の点で相似たものが、いわば“ブドウの房”状のかたまりをなして存在し（グロフはこれを「凝縮体験系」と呼ぶ）、その内のひとつが思い出されると、全部がまさにイモヅル式に導き出されてくること、
- (3) われわれはそして、こうした記憶の浮上に対し、抑え込むのではなく逆に、当の浮上を完了させなくてはならないこと

である。

ところで、誕生以後のトラウマ的痕跡が数多く蓄積されたこの種の「自伝的領域」のさらに背後に、それに先立つ「分娩前後の体験領域」があるとグロフはいう。かれは、この領域についてこう訴える。「子宮—産道—誕生」といった出生前後のこのプロセスをどうした形で体験するか——肯定的にか、それとも否定的にか——に応じて、われわれの性格の基本型（マトリックス）は大きく方向づけられざるを得ないと。「出生そのものが深いトラウマをもたらす」と説くオットー・ランクとは異なり、グロフの診断では、トラウマに関わって深く問題なのは、出生のプロセス自体であるよりはむしろ、このプロセスを体験する仕方（肯定的か、それとも否定的か）の方なのである。出生前後のプロセスは、グロフによって「基本的分娩前後のマトリックス(BASIC PERINATAL MATRICS：略して

BPM)」と命名され、この BPM は、さらに 4 つに細分されている。すなわち、

- 「子宮内の段階」に相当する BPM-I
- 「分娩開始の段階」に相当する BPM-II
- 「産道を進む段階」に相当する BPM-III
- 「誕生の段階」に相当する BPM-IV

である。

このうち、トラウマと関わってとりわけ問題なのは、BPM-II と BPM-III であるとグロフはいう。BPM-II では、陣痛が始まったにもかかわらず、子宮口が閉じたままの状態にあり、それゆえ、「強力な収縮が子どもを全方位的に締め」<sup>4)</sup>つける。不安と危機に満たされつつ、解決の途がまるで見いだされない「出口なし」の状態——ここで得るトラウマの深さは想像を絶するといわなくてはならない。これに対して BPM-III は、「収縮が続き、子宮口が開いて、産道を通る困難かつ苦痛に満ちた推進プロセスのはじまる」<sup>5)</sup>状態である。不安感と危機感、圧迫感と窒息感が、ここでもやはり基本の体験内容となり、得られるトラウマも同様に深くかつ激しいとみられる。

この種の「分娩前後の体験領域」をも通過して、さらに深く魂の底に降下していくと、クライアントは、日常的でパーソナルな基準一般を大きく超え出た「トランスパーソナルな体験領域」に出会うことになる。ここでの体験としては、たとえば、

- 時間の枠を超え出る体験：過去世を体験する、先祖と同一化する、(あるいは逆に) 未来を予知する、自己の未来を旅する等、
- 空間の枠を超え出る体験：透視する、透聴する、テレパシーを覚える、自らが自らの器官・組織・細胞となる等、
- 個人性の枠を超え出る体験：身体離脱を味わう、対人関係において自らが消失する、他者と同一化する、動物や植物と一体化する等、
- 上の 3 者から漏れ出た体験：霊との出会い、霊媒としての体験、ヨーガでいうチャクラの活性化等

が挙げられているけれども、グロフ自身は、この領域をさほど整理して語ってはいない。

では、ブリージングを介してこの「作図学」に示される諸々の領域に触れ、それを再体験した場合になぜ、各種の心身症的な問題や精神障害の類いが劇的に癒されるのだろうか。グロフの臨床経験に基づくなら、心身症的な問題や精神障害の源には、必ずといってよいほど重度の身体的トラウマが確認されるという。このトラウマは、自己の周囲に感情的なエネルギーを封じ込め、一種のブロックを形造っている。ブリージングは、呼吸の操作に

訴えて無意識の門をくぐり抜け、トラウマの元となった未完の体験に直接に介入して、当の体験を、改めて完了へと導き直す強いはたらきを備えている。症状や障害は、こうした中で結果するブロックの「解消」を経て（つまりは封じ込められた感情的エネルギーの「解き放ち」を経て）おのずと癒されるのである。

トラウマを生んだ不徹底な体験を、今一度徹底して体験し尽すこと——癒しにいたる秘訣はこれを措いてない。そして、グロフの観察によれば、トラウマとしてより強力でより広汎に認められるのは、先にも触れたように、「心因的なトラウマ」よりはむしろ「身因的なトラウマ」であり、この身因的なトラウマの最たるものとして、「子宮—産道—誕生」といった分娩前後のプロセスにおいて胎児がほぼ例外なく蒙らずには済まぬ、BPM—IIとBPM—IIIに深く関わった「出生トラウマ」があった。分娩前後の体験は、それ以後の人生における体験の基本型（マトリックス）として強力に立ち働く以上、再体験を介して、当のマトリックスをネガティブからポジティブに書き替える（グロフはこれを「超調整」と呼ぶ）意味は驚く程に大きいといわなくてはならない。

### ③ グロフ（とウィルバー）の果たした役割

最後に、グロフ（とウィルバー）が果たした役割について簡単に触れておこう。その際にまず指摘されてよいのは、「意識のスペクトル」にせよ「ブリージング・セラピー」にせよ、それ自体にオリジナルな要素はほとんどなく、そこに語られた内容はほぼすべて、大なり小なり、過去の精神分析的伝統・宗教的伝統の内ですでに触れられていた点であろう。ウィルバーの場合、自らの禅的な体験を核として、各種の神秘的伝統の語るところを論理的に整理つけて体系化し、「意識のスペクトル」をまとめ上げたのであったし、グロフの場合も、LSDを用いた自らの臨床体験を核として、古来の宗教的行法からとりわけ効果の著しい要素群（呼吸法、音楽、身体運動等）を抽出した上で、これらの新たな組み合わせを図って「ブリージング・セラピー」を生み出したからである。

ウィルバーとグロフのオリジナリティは、だから、説かれた内容の斬新さによりは、斬新ならぬ旧来の内容が、今日的な問題意識に合わせて捉え直された上で、旧来の伝統用語ならぬ今日の科学用語で語り直されている点にあると思われる。旧来の内容を、単に旧来の内容として旧来の用語で語った従来の研究では、内容の上で、たとえトランスパーソナルな領域に触れているにしても、記述の上で、個々の教義と行法が分かちがたく結び合わされている場合が圧倒的に多い。たとえば、禅に一例を求めても明らかなように、そこでは、禅に固有の行法が禅に固有の教義と分かちがたく一体化して、それらがしかも、禅に固有の用語で綴られている。ヨーガにせよ、キリスト教の神秘主義にせよ、イスラムの神秘主義にせよ、およそ事情は異ならないだろう。こうして、特定の宗教を奉じぬスタイルの一般的な現代人が、特定宗教への生理的な拒否反応を覚えることもなく、また何らの専門的な予備知識もなく、ごく気軽に、いうならばスイミング・スクールで泳ぎのテクニッ

クをマスターするように、トランスパーソナルな領域についての基本的な理解と、それに触れる効果的なテクニックを身につける上で、この種の強固な「行法と教義の一体化」は、大きな「躓きの石」ともなりかねない。ウィルバーとグロフの試みは、この一体化を壊して、そこに込められたトランスパーソナルな知見を、個々の教義から切り離して独立させるとともに、そこに組み込まれたトランスパーソナルなテクニックの数々を、個々の行法から切り離して新たに独立させるものであった。「教義と行法の脱宗教化」——ウィルバーとグロフの功績を一言にまとめるなら、こう語るほかはないだろう。

### 3) 科学主義を問う

「宗教的現象をいかに救い出すか」をめぐって、以上に、日常意識に加えて超常意識をも含み込んだより包括的な意識の構造図の一例としてウィルバーの「意識のスペクトル」を、また、これら超常意識に触れる穏当かつ科学的なメソッドの一例としてグロフの「ブリージング・セラピー」をそれぞれ紹介してきたが、最後に、「今日的な宗教一般への根強い拒否反応を底の底で支え、宗教的体験や宗教的現象の受け入れをおのずから拒ませている要因」としてとりわけ執拗な、かつ常識レベルでのわけても面倒な抵抗勢力と考えてよい「今日的風潮としての科学主義」を取り上げてみよう。

“科学とは自然科学を措いてなく、その他はすべて科学の名に値しない”という主張に圧縮される科学主義<sup>1)</sup>に対して、これをいかに論破し克服するかは、メジャーな日常意識状態ならぬマイナーな変性意識状態を直接の研究対象としたトランスパーソナル心理学にとって、心理学としての自らの市民権を確保する上でも、避けて通ることのかなわぬ課題のひとつであった。そこで以下、この問題を集中的かつ包括的に論じたウィルバーの『眼には眼を』に依拠して、科学主義の実際、その成立過程、その吟味と克服の諸点を簡単に整理・紹介してみよう<sup>2)</sup>。

とはいえ、科学主義の克服ないし乗り越えは、われわれの知識成立の基本条件を改めて確認する作業を要請し、この作業はしかも、ただ一種のサイエンスならぬ3種のサイエンスの成立にまで、さらに進んで、2種のスピリチュアル・サイエンスの成立にまで及んで論じられずには済まない。この点はしかし、「スピリチュアル・サイエンスの可能性」という別章を設けて改めて次に論じたい。

#### ① 医学的唯物論ないし脱神聖化としての科学主義

さて、プラグマティズムの大家として有名なW.ジェームズの『宗教的経験の諸相』に次のような一節がある<sup>3)</sup>。

医学的唯物論は、聖パウロがダマスカスへの途上でキリストの幻影を見たのは、かれがてんかん患者だったからであり、大脳皮質後頭葉における放電現象

が、つまりはその原因であるという風に片付ける。また、聖テレサはヒステリー患者であり、アシジの聖フランチェスコは遺伝性変質者に他ならないという風に片付ける。・・・あのカーライルが世の悲惨を沈痛な色調で描くのは、胃腸カタルのせいだと説明する。すべてこのような過度に緊張した心の状態は、つきつめてみると、さまざまな内分泌腺の倒錯作用に基づく病的な特異体質（おそらくは自家中毒）の問題に過ぎず、こうした問題は今後、生理学が明らかにしてゆくだらうとその論は主張するのである。そして医学的唯物論は、こうした説明でもって上に挙げた人たちのもつ精神的権威がうまく覆えせたと考えるわけである。

ここに「医学的唯物論」として紹介されたひとつの姿勢ないし態度は、まさしくひとつの論、ひとつの姿勢、ひとつの態度であるにもかかわらず、今日、ワン・ノブ・ゼム (ONE OF THEM：数ある姿勢のひとつ) としてのあり方を超えて、オンリー・ワン (ONLY ONE：これ以外の姿勢なし) としての地位を確保しているといっても過言ではない。自然科学の驚異的な発達によって各種の機械がわれわれの生活世界に侵入した結果、そうした機械を日々の生活で多用するわれわれの内に知らず識らず、機械と人間をアナロジカルにとらえ、人間的現象の数々を機械論的あるいは生理学的に解釈づけようとする生物学的還元主義(ジェームズの言葉を借りるなら「医学的唯物論」) が醸成されてくるのは、むしろ当然すぎる当然ともみられるからである。

けれども、環境世界への機械の進出に大きくは支えられ、さらには、自然科学的な見方・考え方のマスターを現代の教養として義務づけられたわれわれの学習状況に助けられて、生物学的還元主義がどれほど他の立場を圧して流行の主座を占めるにしても、それ自体はやはり、ひとつの主義ないし論であることをやめることはできない。なるほどそれは、魅力にあふれた強力かつ有力な主義ないし論であるにしても、その魅力性・強力さ・有力性のゆえにワン・ノブ・ゼムとしてのあり方をやめて、直ちにオンリー・ワンの地位を獲得するわけではない。加えて、この立場の徹底と一貫は、上にも引用したジェームズの指摘内容、すなわち聖パウロを「てんかん病者」、聖テレサを「ヒステリー患者」、聖フランチェスコを「遺伝性変質者」、カーライルを「胃腸カタル」と診断する、聖者ないし偉人に備わる当の聖者性ないし偉人性のすべてをノーマル以上の何ものかとしてでなく、逆にノーマル以下の何ものか、つまりは病気ないし異常として解釈づける極端な脱神聖化を導き出さずには措かない。こうした脱神聖化はしかし、あまりの極端さと徹底のゆえに、われわれの一般常識から見てかなり無理のある、こじつけの感を免れることのできない一種の不自然さを備えているのではないだろうか。

## ② 科学主義の成立過程

われわれのもつ常識に忠実である限り、聖パウロ、聖テレサ、聖フランチェスコ等の聖者たちは、当の聖者性において常人以上と解釈され、カーライル等の偉人たちも、当の偉人性においてやはり常人以上と解釈されるのが普通だろう。このように、極端な脱神聖化に覚えるわれわれの戸惑いと異和感がかなり一般的なものである以上、われわれには、この種の脱神聖化への再度の問い直しが、かなり強く求められていると思われる。

ところで、こうした脱神聖化の背後には、先にも触れたように、それを支える強力なりアリティとして、自然科学に立脚した高度産業機械社会の大々的な躍進とそれを承けた生活世界の飛躍的な水準向上があった。この躍進と恵沢をバックに、自然科学的な見方・考え方は今日、そのみが科学的で客観的な見方・考え方であるかのような誤解を、われわれの内に生み出してもいる。自然科学に代表される経験主義的な研究が科学そのものと同一視され、“科学とは経験主義的な研究を措いてない”といったいわゆる「科学主義」が、われわれ一般の隠れた常識としてどれほど広く確立されているかは、改めて指摘するまでもないだろう。だが、いかに広く確立されているにせよ、こうした経験主義的な研究は元々、類いまれな靈感の書である『バイブル』を信奉するあまり、これにのみ依拠して、あろうことかこの世の事柄——たとえば地球の構造や人類の起源等々——の一切を説明づけた上で、異説の介在を頑なに拒んだ教会勢力による不当な知の支配に対して、ガリレオとケプラーが、事実の側に立って企てた根強いプロテストに端を発していたといえる。かれら2人は、魂の世界についてはともかく、われわれの五感ではっきりと捉えることのできる事実の世界に関しては、五感という「肉の眼」のみを用いて立ち向かうべきことを強く訴え、あくまでも実験と測定に依拠して厳密に考察を押し進めていったからである。この姿勢は、たとえば一方に、キリスト僧コスマスがA.D. 535年、その著『キリスト教地誌』で『バイブル』を逐語的に解釈し、地球には北極もなければ南極もなく、底辺が高さの2倍ある平行四辺形であると断定したナンセンスさ<sup>4)</sup>、あるいは17世紀に、イギリスの僧正J.アシャーが、同じく『バイブル』に基づいて人類の誕生をB.C. 4004年と計算し、この憶説が当時、キリスト教文化圏に属する人びとの間で広く信じられていたナンセンスさ<sup>5)</sup>を対置させる時、その価値と意味がいつそう明らかになるだろう。

実験と測定を核としたこの研究で採られたのは、具体的には、「あるひとつを除くすべての変数が一定となるような状況を考え出して、そのひとつの変数を変えながら何回か実験を重ね、その上で結果を検討する」<sup>6)</sup>という様式であった。こうした中から次々と、単にこれまでの思弁のみからは捉えることのできなかつた新事実が数多く見い出されていった。たとえば、ガリレオの発見した「あらゆる物体は同じ速度で落下する」という事実などもそのひとつだろう。周知のように、ガリレオ以前、「重さの勝る物体は、重さの劣る物体より速く落下して当然」と一般には固く思い込まれていた。ガリレオはしかし、こうした通念に満足せず、実験に訴えてこれを確かめようとした。すなわち、ピサの斜塔に登って、

同じ大きさの物体を、同じ高さから、同時に落としたのである。ただ重さのみを違えて。その結果は、予想に反して、両者は同時に着地した。こうして、「重い物体の方が速く落下する」という一般通念は、事実によって見事に否定されたわけであるが、これに類する発見はその後も続出し、結果として、「身の現象の中から測定可能な要素を探し出し、その上で、そうした物理量同士の関係を求める」<sup>7)</sup>というあり方が、経験主義的な研究の基本ルールとして確立されることになった。自然科学に代表される経験主義的な研究とは、このように、われわれの「肉の眼」を介して収集される諸々の知識を効果的にまとめ上げた、ひとつの体系に他ならない。「肉の眼には肉の眼のことを語らせよう」<sup>8)</sup>というガリレオとケプラーを貫いてみられた基本姿勢にこそ、この研究のそもそもの発端は求められるのである。

### ③ 科学主義の吟味

およそこうした成立の由来と内容上の特色を備えた経験主義的な研究は、当の事実に認識に積み重ねの効くところから加速的な発展を遂げ、今日、為された業績の多さと大きさに関する限り、少くとも疑いをはさむ者はいないだろう。この輝かしい実績はしかし、他ならぬこの研究を、いわゆる「科学主義」に導き入れる負のアクセラとして作用した。経験主義的な研究は、自らの依拠する「肉の眼」のあまりに大きなパワーに酔い、その効験を誇るあまり、「肉の眼で見えないものは経験主義的に立証できない」から「肉の眼で見えないものは存在しない」<sup>9)</sup>、あるいは、「五感の領域にはすぐれた知識獲得の方法がある」から「したがって、その他の領域で得られた知識は無効である」<sup>10)</sup>、大胆にも越境して憚らなかつたからである。だが、経験主義的な研究にあらざれば科学にあらざるといったこの姿勢、あるいは、立証可能性を感覚経験による立証可能性にのみ極限するこの立場は、実に、部分が全体を装うひとつの虚偽に他ならない。ガリレオとケプラーに先立つ昔、『バイブル』の権威に訴えて教会勢力が「バイブル型科学主義」とでも名づけるべき形で知の世界を支配したのと同じく、今日では、この支配からの脱却を訴えかつ実践した当の科学そのものが、あろうことか同じ誤りをくり返している。自らの努力と訴えの帰結が、このような逆の「科学主義」である現実を目にした時、ガリレオとケプラーなら果たして何と云うだろうか。

みずからに見えないものは、そのまま正直に「見えない」と告白するか、あるいは沈黙を守ればよいところを、あろうことか、そうしたものは「存在しない」と公言して憚らぬ厚顔によって、経験主義的な研究は、肉以外の眼で捉えられる現実についても、的外れにも、肉の眼を基準にその妥当性を判定するほかはない。そして、肉以外の眼をすべて否定する限り、聖パウロを「てんかん病者」、聖テレサを「ヒステリー患者」、聖フランチェスコを「遺伝性変質者」、カーライルを「胃腸カタル」と診断して顧みないあの解釈は、あくまでも正しいとみななければならない。問題はしかし、われわれに備わった認識の眼が果た

して「肉の眼」に尽きるのかどうかの点にある。東西の伝統に少しでも耳を傾けるなら、感覚的領域をその対象とする「肉の眼」に加えてさらに2つ、概念的・抽象的領域を対象とする「理知の眼」と、さらには霊的・超越的領域を対象とする「瞑想の眼」の存在に注意を促すいくつかの声を、われわれは遠く耳にするのではないだろうか。というのも、3つの認識能力・それに見合う3つの対象域・それに応じた3つの認識について、聖ボナベントゥラ、永遠の哲学、聖ビクトル等が、以下のような区分と命名を行なっているからである<sup>11)</sup>。すなわち、

〈3つの認識能力〉	〈3つの対象域〉	〈3つの認識〉	
肉の眼	粗領域	コギタティオ	外的な下位の光
理知の眼	微細領域	メディタティオ	内なる光
瞑想の眼	元因領域	コンテンブラティオ	上位の光
(聖ボナベントゥラ)	(永遠の哲学)	(聖ボナベントゥラ)	(聖ビクトル)

そして、直角三角形に関するピュタゴラスの定理 ( $c^2 = a^2 + b^2$ ) といった数学的な知識の妥当性を検証するのが「肉の眼」でなくて「理知の眼」であるように、宗教的な啓示の妥当性を検証するのも同じく、「肉の眼」でなくて「瞑想の眼」であるといわなくてはならない。先にみた脱神聖化ないし生物学的還元主義はこうして、元々は「瞑想の眼」の領分に属するところに「肉の眼」を無理矢理に押し入らせたカテゴリー上の混乱、つまりは「カテゴリー・エラー」の好例とみることができる。

科学主義という「カテゴリー・エラー」に色濃く染め上げられた経験主義的な研究は、ところで、主張する内容の点でも、明らかに論理矛盾を含んでいるといわなくてはならない。先にも見たように、この研究は、「経験主義的な証明は、感覚領域における事実の入手には最適の方法である」と言うべきところを、あろうことか、「経験主義的に立証できる命題のみが真実である」と主張した<sup>12)</sup>。だが、「経験主義的に立証できる命題のみが真実である」というこの命題は、果たして、「経験主義的に立証できる」のだろうか。冷静に眺めれば明らかなように、「経験主義的に立証できる命題のみが真実である」という命題は、論証済みの真理というよりは、この研究の基本的な態度表明に近いのである。態度表明に近いものである以上、それを、「経験主義的に立証する」ことなどそもそもできようはずがない。そして、おのれの命題に忠実である限り、「経験主義的に立証できない」命題は当然「真実とはいえない」のだから、この命題も、つまるところ虚偽と判定されざるをえない。すなわち、「科学的真理の他に真理はないという主張は、それ自体、科学的真理ではありえない」<sup>13)</sup> というアイロニカルな結論が導き出されてくるのである。こうした科学主義の論理矛盾は、相対主義の論理矛盾とも軌を一にする。「万物の尺度は人間」というプロタゴラスの言葉に代表される相対主義は、アイロニカルにいうなら、「すべては相対的であって、絶対的なものなどおよそないということこそ、唯一絶対の事柄である」という立場ないし主張であっ

た。この立場ないし主張が自らの内に、隠すことのできぬ論理矛盾を含んでいることは改めて指摘するまでもあるまい。というのも、「すべては相対的である」という自らの主張に徹底して忠実である限り、相対主義の絶対性までも否定されざるを得ないだろうし、逆に他方、相対主義の相対性をあくまでも訴えるなら、「すべては相対的である」という主張内容を自己否定しないわけにはいかないからである。とはいえ、科学主義にせよ相対主義にせよ、内にこうした論理矛盾を含みつつも、われわれへの力と説得性に何らの衰えも示していない。

#### 4) スピリチュアル・サイエンスの可能性

##### ① 科学主義の乗り越え

さて、前章でみた科学主義は、ではいかなる方向に乗り越えていけばよいのだろうか。科学主義とは要するに、「肉の眼」を介して得られる経験主義的な知識を、ワン・オブ・ゼム（数ある知識のひとつ）としてでなくオンリー・ワン（知識として唯一のもの）と見る立場を意味する以上、上の問いは逆に、経験主義的な知識がオンリー・ワンでなく、まさにワン・オブ・ゼムに他ならないことを証す方向にその答えが求められてしかるべきだろう。具体的には、経験主義的な知識とは異なる知識を、まさに“知識”として立証できる方法を明らかにするものひとつの手ではないだろうか。この点を考えるにあたり、まず、知識が知識として成立する基本的な3条件に触れてみよう。

知識のそもそものベースについては、おそらく、直接的な経験——感覚的領域のそれであれ、概念的・抽象的領域のそれであれ、霊的・超越的領域のそれであれともかく——を挙げるほかはないだろうが、では、こうした直接的経験のベースとしての妥当性（あるいは基本データとしての妥当性）を確かめる手立てとして、具体的に、どのような方法が考えられるのだろうか。何らかの直接的経験が基本データとしての妥当性を保証される時、そこには、およそ次の3条件が例外なく満たされていると思われる。すなわち、

第1に「介助的指示」、

第2に「直観的感受」、

第3に「共同体的確認」

である<sup>1)</sup>。あるデータの妥当性を探るにあたってまず必要なのは、「もしこれを知りたいければ、これこれをせよ」と命じる具体的なマニュアルの提示であるだろう。第1の「介助的指示」とはこれをいう。次いでわれわれは、このマニュアルに基いて行動し、対象分野での直接的な経験を得る。第2の「直観的感受」とはこれをいう。われわれはさらに、自らの経験内容の真偽を確かめるために、第1と第2のプロセスをしかるべく完了した他のメンバーの前に結果を公表し、その照合と確認を図らなくてはならない。第3の「共同体的確認」とはこれをいう。

今、経験主義的な研究の一例ともいべき「水の電気分解」を選んで、 $H^2O \rightarrow 2H + O$ （水を電解して得られる水素ガスと酸素ガスの容積比は2対1であること）の妥当性がいかなる手順で立証されるかを見てみよう。われわれはまず、これを立証するにあたり、電気分解の基本的な技術をマスターし、電解装置を作成し、実験そのものを実施し、ガスの収集を行わなくてはならない（「指示」の段階）。次いで第2に、収集したガスの容積を測定しなくてはならない（「感受」の段階）。そして最後に、「指示」と「感受」の両段階を共有する他の研究者仲間と、データそのものを比較し照合しなくてはならない（「確認」の段階）。こうした照合と確認を経てはじめて、2対1という容積比は立証されるのである。以上の電解の例からも明らかなように、われわれのデータがあくまでもデータとして有効であるのは、それが「指示」「感受」「確認」の3手順を正しく経ていることによる。経験主義的な研究の特徴は、それゆえ、データを立証する方法論がきわめて厳密かつ精緻である点もさることながら、それよりはむしろ、データそのものが徹底して「肉の眼」の領分に属する点にこそ求められる。経験主義的なデータが、いわゆる立証されたデータとして知識にあずかることができるのは、実に、それが感覚的領域に属し「肉の眼」ではっきりと捉えうるからではなく、「指示」「感受」「確認」という先の手順を正しく経ていることによる。

## ② 3種のサイエンスの成立

ところで、知識成立の基本条件をこうした3手順の内に求めるなら、われわれは、経験主義的な研究とは異なる研究についても、同様に「サイエンス」の名を与えることが可能になるのではないだろうか。たとえば、心的・現象学的な研究に属すると思われるフロイトの精神分析学は、無意識・トラウマ・抑圧に関する諸々のデータを収集するにあたり、次のような手順をはっきりと厳守していた。すなわち、自由連想法や夢の分析といった無意識探求の具体的方法をまず提示し（「指示」に相当）、それによって得られた各種のデータを克明に記録した上で（「感受」に相当）、そうしたデータを今度は、同様な資格を備えた他の研究者からなる共同体の内ですぶさに比較し確認してもいる（「確認」に相当）。精神分析学はそれゆえ、自然科学的な知識とはいささかタイプを異にする別種の知識からなる、同様にひとつの「サイエンス」であるとみることができる。

さらに今ひとつ、経験主義的な研究とも心的・現象学的な研究ともタイプを異にする、いうならば霊的・超越的な研究とも呼ぶべき禅の場合はどうだろうか。ここでもやはり、われわれは、「指示」「感受」「確認」という3段階を見い出すことができる。禅には明らかに、「もし仏性の有無を知りたければ、まずこれをせよ」<sup>2)</sup>と命じる座禅に関する具体的な教示があり、座禅を介した仏性の直接的な感受があり、感受された内容を禅師や同行の瞑想者からなる共同体の内ですばりに確認し合う作業があるからである。こうして禅もまた、自然科学や精神分析学とはいささかタイプを異にするものの、それ自体としてはやはりひと

つの「サイエンス」とみることができる。

このように見ていくと、感覚的領域のサイエンス、概念的領域のサイエンス、超越的領域のサイエンスを問わず、およそその分野の「サイエンス」に発言資格をもつかどうかは、当の本人が、その分野の与える具体的な「指示」に従って、特定の眼（「肉の眼」であれ「理知の眼」であれ「瞑想の眼」であれ）を訓練し終えたかどうかで判定されるといっても過言ではないだろう。特定の「指示」に基づいて厳しく訓練された眼は、その分野における「公的な眼」に他ならないからである。それゆえ、「もしある人が特定の眼を訓練することを拒んだとすれば、それは、見ることを拒んだに等しく、われわれはその人の意見を無視し、共同体的証明に関する票決から除外<sup>9)</sup>して構わないことになる。こうして、仏性ないし霊的本性の内在について、その証明をしつこく迫る人たちに於いてわれわれができる最善のことは、霊的・瞑想的な知識を得る具体的方法（座禅やヨーガ等）について説明し、「あとは御自分で確かめてみなさい」と通告する以外にありえない。 $H_2O \rightarrow 2H + O$ といった化学的知識が、訓練された化学者にとっては公的な知識であり、直角三角形に関するピタゴラスの定理（ $c^2 = a^2 + b^2$ ）といった数学的知識が、訓練された数学者にとっては公的な知識であるように、仏性に関する瞑想的知識もまた、訓練された瞑想家にとっては同様に公的な知識であるからである。

### ③ 2種のスピリチュアル・サイエンス

サイエンスはこうして、その対象とする領域を異にして大きくは3つ成立することになる。すなわち、物理学、化学、生物学、天文学、地質学等のいわゆる感覚的領域のサイエンス、言語学、数学、論理学、心理学、現象学、哲学等のいわゆる概念的領域のサイエンス、禅、ヨーガ等のいわゆる超越的領域のサイエンスである。ところで、最後に挙げた超越的領域のサイエンス、いうならば「スピリチュアル・サイエンス」ないし「トランスパーソナル・サイエンス」は、一般にどのような姿で目にされるのだろうか。その形態は、超越的領域の知が大きくは2種に類別されるところから、これに呼応して、同じく2種に類別されると思われる。すなわち「マンダラの科学」と「グノーシスの科学」である。

たとえばわれわれは、超越的領域のいかにあるかを探求するにあたり、一応は「肉の眼」を除いた2つの眼（「理知の眼」と「瞑想の眼」）を用立てることができるだろう。そして、あくまでも論理に訴えて対象の描き出しに努める「理知の眼」がこの領域に向かう時、描き出された領域そのものは、あるいは逆説的な、あるいはマンダラ的な装いをまとってわれわれの前に現われ出ざるを得ないのではないだろうか。この領域のロジカルな描き出しが、当の論理性と整合性を消失し、あるいは逆説的なあるいはマンダラ的な形をとるのは他でもない、この領域自体に、自/他の区分を超え出たトランスパーソナル性や、（生/死、心/身体、時間/永遠、存在/無といった）2元の融合したユニティ性など、論理をはみ出す特性の数々が付着してみられるからである。

たとえばA.マズローは、この領域に触れた人間が獲得する特性を次のようにスケッチしている。「利己的であると同時に非利己的であり、ディオニュソス的であると同時にアポロンの的であり、個人的であると同時に社会的であり、合理的であると同時に非合理的であり、他と溶け合うと同時に他から離脱している・・・、非合理性、対立、完全な矛盾の存在とその知覚が同時的に成立しているのだ<sup>9)</sup>と。こうした人間的特性を導き出す当のリアリティを論理に訴えて描き出そうとするなら、描き出しの言葉はおのずから、「AであってAでない」といった逆説の形か、「AかBか」でなく「AもBも」といったマンダラの形をとるほかはないだろう。とはいえ、逆説的あるいはマンダラ的であるのは、この領域のロジカルな描き出しを図る言表の方であって、超越的な領域そのものが逆説的あるいはマンダラ的なわけではない。「<sup>10)</sup>霊”としての“<sup>11)</sup>霊”は断じて逆説的ではない。・・・しかし、それを心的な言葉に翻訳すると、結果として逆説性が現われ出る<sup>12)</sup>に過ぎないからである。それゆえ、この領域を「<sup>13)</sup>理知の眼」ならぬ「<sup>14)</sup>瞑想の眼」で直接に映し出すなら、それは、逆説性とマンダラ性を越え出た“<sup>15)</sup>霊知”としてのグノーシスとなる。

このように、超越的領域を対象とした知は大きく、逆説的・マンダラ的なタイプと霊知的・グノーシス的なタイプに分かれざるを得ないけれども、両者は、ではどのような関係にあるのだろうか。超越的領域をそのままに映し出すグノーシスは、これを間接的に描き出す逆説的・マンダラ的な知に比べて、いうならば「リアリティ自体」と「リアリティの描像」の間に認められる差ないし距たりを保っていると思われる。一方は実物で他方はその模像、一方は食事で他方はそのメニュー、一方は領土で他方はその地図といった関係の当てはめが可能とすると、この模像的でメニュー的で地図的な知を中心としたタイプの「スピリチュアル・サイエンス」は、超越的領域の特色を間接に教え、グノーシスを準備する先触れとしてなるほど有益ではあるものの、他方、実物的で食事的で領土的な知としてのグノーシス自体に置き換わることはできないとみななければならない。この領域の感受は、基本的に、「<sup>16)</sup>瞑想の眼」に訴えて得られるグノーシス以外にありえないからである。「スピリチュアル・サイエンス」ないし「<sup>17)</sup>トランスパーソナル・サイエンス」の核心は、こうして、当の領域に即応した「<sup>18)</sup>指示」「<sup>19)</sup>感受」「<sup>20)</sup>確認」の3要件を満たす手順を実践して、各人が直接にグノーシスを得ること（つまりは禅、ヨーガ等の「<sup>21)</sup>グノーシス的<sup>22)</sup>科学」）にあるといえる。

## おわりに

以上に、「<sup>23)</sup>宗教をどう捉えるか」「<sup>24)</sup>死をどのようにイメージするか」「<sup>25)</sup>宗教的現象をいかに救い出すか」の3点に絞って、非宗派的宗教教育に向けた地固めないし地慣らし作業を試みてきたが、わけても最後の「<sup>26)</sup>宗教的現象をいかに救い出すか」については、トランスパーソナル心理学の目下の知見を大幅に活用した。そうした考察の道筋を改めてふり返してみると、宗教に関わる事柄一般の人間的事柄としてのナチュラルさとポピュラーさを一貫

して訴える姿勢の内に、ある種のオプティミズムが隠し様もなく存在したように思われる。宗教的体験にせよ死にせよ、あくまでも不気味な未知として、遠い昔からあるいは避けられあるいは敬遠されてきたネガティブな事象を、基本的には好ましい未知のイメージに置き換えて、このイメージを前提に立論してきた点は否めないからである。けれども、こうしたイメージの転換は、果たして基本的に妥当なのであろうか。

これまで、あまりにも避けられ敬遠されてきたこれらの事象から、必要以上の回避ないし敬遠という負の偏りを修正する狙いで展開されたここでの論は、当然ながら、一度は試みられねばならぬものであった。そこではしかも、先行してある負の偏りに対抗して、逆方向への偏りが無意識裡に心掛けられていた気がしないでもない。逆方向への偏りにはむしろ、本来のバランスを回復させる上での意義と価値は十分に認められるものの、論自体としてはしかし、オプティミズムの雰囲気を一とき強く漂わせる結果となった。

けれども、こうしたオプティミズムを介して従来の回避主義ないし敬遠主義が一応は相殺された今、改めて宗教的事象に目を向けるなら、それは、われわれにとって基本的に「パンドラの箱」としてあるのではないだろうか。蓋を開けて底の底まで掘えぬかぎり、何が詰まっているかについて軽々に断定できかねる点が少なくないからである。あのパンドラの箱には、ゼウスが人類一般に与えた数々の災厄とともに、微かな希望も収められていたと囁かれている。こうした寓話も物語るように、箱の中身を怖れるべき災厄一色に染め上げるのも、あるいは逆に、明るい希望一色に染め上げるのも、共に極端のそしりを免れないであろう。先に決め込むのではなく、あくまでも慎重に、できるだけ無理をしない形で恐れず足を踏み入れていく中で、おのずと体験される諸々の事実に基づいて当の中身を確定していく以外に道はないからである。

最初にナマコを食べた人間は、かなりの勇気の持ち主だったのではあるまいか。あのグロテスクな生き物が果たして身体に毒でないか否かは、現実食した上で、おのが胃の異常を介して確かめる他に手だてはないからである。これに類した無数の挑戦がくり返される中で、先人たちの苦い失敗と思わぬ発見が体験として積み重ねられ、徐々に、さまざまな分野での「パンドラの箱」が開けられていったのが、われわれの貴い歴史でもあった。その線に沿って考えるなら、LSDや大麻などのドラッグ問題についても、ただ闇雲に禁止するよりはむしろ、アルコールやタバコと基本的には同類の嗜好品とみなした上で、その適量を各人なりに心得て賢明に付き合うのがより得策といえるかもしれない。これは、宗教的事象との接触を促すヨーガや座禅などの具体的行法についても、やはり同様に当て嵌まると思われる。

「パンドラの箱」を自分で開ける際の怖さのひとつは、ふさわしい先達ないし案内人を欠く怖さであろう。何らかのアクシデントないしトラブルに陥った際に、対応を求めて当惑するおのれに適切なアドバイスを与えてくれる先達ないし案内人が存在するか否かは、当のパンドラの箱を開けるか否かを決める際の大きな要因となる。何も自分が初めてでな

く、すでに幾人かの先駆者がみられること、そうした人たちの伝え残した体験的情報が、貴重な予備知識として現実に身に付けうること、およそ以上の2点が確認されるだけでも、励ましの効果は小さくあるまいと思われる。というのも、宗教的事象という「パンドラの箱」を開けるには、おのれ自身を安全な部外者の立場に置くことは適わず、まさに当事者として何らかの程度、開けた結果を直接に引き受けずには済まないからである。引き受けた事柄がどうした作用を及ぼし、どうした変容をわが身にもたらすか、また、こじれた際にはどうした修復が可能であり、その具体策はどうしたものか——少なくともこれら諸点への予備知識なしに、パンドラの箱を開けるのは無謀とみななければならない。

宗教的事象に対する一般的回避ないし敬遠には、この事象に備わった特有のあやふやさ・うさん臭さも強く作用していると思われる。ここに「特有のあやふやさ・うさん臭さ」と表現したのは他でもない、当の宗教的事象が、われわれに馴染みの物理的・日常的事象からはみ出した非物理的・心的特徴を備えていて、それゆえ、この事象に触れた諸々の発言について、本物と偽物の峻別がきわめて曖昧なこと、その結果、勝手気ままな主観的発言の類いも、真に権威ある発言に劣らず大手を振ってまかり通る余地を残している点である。さらにはこれと関連して、日常的事象からはみ出した宗教的事象に触れて発言する人たちが、一般には日常人ならぬ非日常人として特徴づけられるものの、非日常人としてのかれらは他方、日常人以下の「狂った人」と日常人以上の「悟った人」に大きくは細分され、こうした両者の区分けがかなり厄介な点も「特有のあやふやさ・うさん臭さ」の一端を形造っていると考えられる。

あるいは、宗教的事象に対する一般的回避ないし敬遠には、上にみた事象サイドでの事情に加えて、われわれの内面サイドでの事情も同様に加担しているのではないだろうか。ここに「内面サイドでの事情」と表現したのは他でもない、おのれを明け渡すことへの執拗な抵抗そのものを指す。というのも、宗教的事象に関わる時、自/他の区分という日常的事象での自明の前提が揺らぎ崩れて、大なり小なり、この区分のボヤケないし解消に直面すると報告されているのであるが、これとの直面はしかし、われわれの側でひとつの体験として素直に受容されるわけではない。ある場合には故意に目が背けられ、ある場合には錯覚として排除され、ある場合には興味をそそられつつも恐れ逡巡される。こうした原因の主たるひとつは、上にも指摘した「おのれを明け渡すことへの執拗な抵抗」ではないだろうか。たとえば、アルコールに酔い潰れるといった卑近な日常例を考えてみよう。人に応じて幾分の差は認められるものの、普通人なら一般に、アルコールの度が過ぎて自己という意識を失うギリギリの瀬戸際で、このまま進めば無意識の闇に吸い込まれるなど直感し、一瞬のためらいを心に走らせた上で、あるいは力を入れて意識の世界に踏みとどまり、あるいは力を抜いて無意識の闇に身を委ねるといった体験を、おそらくは一度ならず味わったにちがいない。アルコールに限らず、催眠術、ドラッグ(向精神性薬物)、その他の手段を介して“おのれを明け渡さざるを得ない”瀬戸際に立たされた時、われわれのみせる拒

否と抵抗にはかなり根深いものがあるのではないだろうか。

さらに今ひとつ指摘しておきたいことがある。他でもない、宗教的世界の一般的知見とトランスパーソナル心理学的世界のその間に埋めがたい差の認められる点である。たとえば、グロフの「意識の作図学」を論じた箇所（〈2〉のC）の2）の②）で挙げられた「時間の枠を超え出る体験（過去世を体験する、先祖と同一化する、未来を予知する、自己の未来を旅する等）」「空間の枠を超え出る体験（透視する、透聴する、テレパシーを覚える、自らが自らの器官・組織・細胞となる等）」「個人性の枠を超え出る体験（身体離脱を味わう、対人関係において自らが消失する、他者と同一化する、動物や植物と一体化する等）」「上の3者から漏れ出た体験（霊との出会い、霊媒としての体験。ヨーガでいうチャクラの活性化等）」といったいわゆるトランスパーソナルな体験一般は、宗教的世界では総じて、外からの霊的干渉ないし介入として把握される傾向が強いものに対して、トランスパーソナル心理学の世界では総じて、おのれの内なる要素の発現として把握される傾向が強い。先に紹介したグロフはこれの典型であろう。その著『脳を超えて』でかれは、トランスパーソナルな領域での諸現象を記述しつつも、基本姿勢において、これらすべてを内的要素の発現として説明づけようと努めているからである。けれども、トランスパーソナル心理学は果たして、こうした立場を最後まで貫き通せるのであろうか。そうすることで果たして、説明し尽くしえない現象を後に残さないのか否か——これは、今後の流れの中で見定めたい点のひとつである。

## 注

〈2〉のC）の1）

- 1) マズローの代表作のひとつには、事実、Toward a Psychology of Being (1962) の名が与えられている（邦訳は『完全なる人間』誠信書房、昭和62年）。
- 2) ウィルバーの「意識のスペクトル」の何であるかは、Ken Wilber, The Spectrum of Consciousness, 1977（邦訳：吉福・菅『意識のスペクトル（1）（2）』春秋社、昭和60年）に詳しく、グロフの「意識の作図学」の何であるかは、Stanislav Grof, Beyond the Brain: Birth, Death and Transcendence in Psychotherapy, SUNY Press, New York, 1985（邦訳：吉福・星川・菅『脳を超えて』春秋社、1988年）に詳しい。
- 3) 「プレ・パーソナル」「パーソナル」「トランス・パーソナル」の3層を、系統発生のレベルで、直立猿人から現代人にいたる意識発達のコースに位置づけた作品として、Ken Wilber, UP FROM EDEN—A Transpersonal View of Human Evolution, SHAMBHALA, BOULDER, 1983（邦訳：松尾式之『エデンから』講談社、1986年）がある。
- 4) 意識発達の9レベルのこうした命名は、Ken Wilber, Eye to Eye, The Quest for the New Paradigm, Anchor Books, New York, 1983（邦訳：吉福伸逸他『眼には眼を』青土社、1987年）のChap. 7: The Pre/Trans Fallacy, pp.239-240に基づく。他の作品（たとえば『アートマン・プロジェクト』など）では、この命名は、以下のようになっている。

- |           |   |         |
|-----------|---|---------|
| (1) プレローマ | } | プレパーソナル |
| (2) ウロボロス |   |         |
| (3) ティポーン |   |         |

(4) ペルソナ	}	パーソナル
(5) エゴ		
(6) ケンタウロス		
(7) プシュケー	}	トランスパーソナル
(8) 微細		
(9) 元因		
(統一意識)		

- 5) 「ケンタウロス」での実感内容については、Ken Wilber, NO BOUNDARY—Eastern and Western Approaches to Personal Growth, Shambhala, Boulder & London, 1981, pp.116—120 (邦訳：吉福伸逸『無境界—自己成長のセラピー論』平河出版社, 1986年, 201—207頁)を, また, 「トランスパーソナルな帯域群」での実感内容については、Ken Wilber, *ibid.*, pp.131—136 (邦訳, 224—232頁)を要約した。
- 6) Ken Wilber, *ibid.*, p.142 (邦訳, 241頁).
- 7) Ken Wilber, *ibid.*, p.153 (邦訳, 260頁).
- 8) Ken Wilber, ODYSSEY: A Personal Inquiry into Humanistic and Transpersonal Psychology (Journal of Humanistic Psychology, Vol.22 No. 1, Winter 1982) p.80 (邦訳：村島義彦「Ken Wilberのヒューマン・ネイチャー論紹介 (Part II)」岡山理科大学紀要・第21号B, 1985年, 35頁).

<2> のC) の2)

- 1) 「ブリージング・セラピー」については、S. Grof, The Adventure of Self-Discovery: Dimensions of Consciousness and New Perspectives in Psychotherapy and Inner Exploration, SUNY Press, New York, 1988 (邦訳：吉福・菅『自己発見の冒険 (1)』春秋社, 1988年)のとりわけ Chap. II: Principles of Holotropic Therapy (pp.165—219)を, また「意識の作図学」と「癒しの力学」については、S. Grof, Beyond the Brainのとりわけ Chap. II, VI, VIIを, それぞれ参考にした。
- 2) S. Grof, Beyond the Brain, p.95 (邦訳, 137頁).
- 3) S. Grof, *ibid.*, p.93 (邦訳, 134頁).
- 4) S. Grof, *ibid.*, p.105 (邦訳, 145頁).
- 5) S. Grof, *ibid.*, p.105 (邦訳, 145頁).

<2> のC) の3)

- 1) ここにいう科学主義とは、科学(サイエンス)の資格を自然科学にのみ認めて、「科学=自然科学」の等式を奉じつつ、当の自然科学を ONE OF THEM (数ある科学のひとつ) から ONLY ONE (科学として唯一のもの) の地位に移行させる立場一般を指す。
- 2) Ken Wilber, Eye to Eye の Chap. I: Eye to Eye.
- 3) William James, The Varieties of Religious Experience (William James, WRITINGS 1902—1910. The Library of America—38, New York, 1987) p.21 (邦訳：榎田啓三郎『ウィリアム・ジェームズ著作集3, 宗教的経験の諸相 (上)』日本教文社, 昭和37, 19—20頁).
- 4) Ken Wilber, *ibid.*, p.11 (邦訳, 28頁).
- 5) 『森昭著作集6: 人間形成原論 (遺稿)』黎明書房, 昭和52, 76頁.
- 6) Ken Wilber, *ibid.*, p.14 (邦訳, 33頁).
- 7) Ken Wilber, *ibid.*, p.16 (邦訳, 36頁).
- 8) Ken Wilber, *ibid.*, p.17 (邦訳, 37頁).
- 9) Ken Wilber, *ibid.*, p.21 (邦訳, 44頁).
- 10) Ken Wilber, *ibid.*, p.21 (邦訳, 44頁).
- 11) Ken Wilber, *ibid.*, pp.2—7 (邦訳, 14—22頁).
- 12) Ken Wilber, *ibid.*, p.29 (邦訳, 58頁).

13) Ken Wilber, *ibid.*, p.29 (邦訳, 58頁).

〈2〉のC)の4)

1) Ken Wilber, *Eye to Eye*, p.44 (邦訳, 80-81頁).

2) Ken Wilber, *ibid.*, p.60 (邦訳, 106頁).

3) Ken Wilber, *ibid.*, p.75 (邦訳, 130頁).

4) Ken Wilber, *ibid.*, p.75 (邦訳, 131頁).

5) Ken Wilber, *ibid.*, p.202 (邦訳, 341頁).

## Some Consideration about Religious Education

— From the Standpoint of Transpersonal Psychology (II) —

Yoshihiko MURASHIMA

*Faculty of Science,*

*Okayama University of Science,*

*Ridaicho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1995)

In Japan, no religious education is practiced in every public school systems. For the article 9 of Basic Educational Law ordains us "Every schools established by public facilities should not do all religious education for the benefit of special religious sects and other religious actions"(the provision 2).

But it is necessary for us to cultivate and enrich our religious sentiments in order to carry on fruitful social life. So the article 9 of Basic Educational Law ordains us "The tolerance manner about religion and the status of religion in our social life should be esteemed from the standpoint of education"(the provision 1). Then how we can practice such a religious education as satisfy both provision 1 and 2 together? To answer this question, I want to reconsider next six things like religion itself, our image of death, our structure-map of consciousness, concrete method to touch the religious phenomena, Scientism and probability of spiritual science.

So the contents of this paper is as follows;

<Prologue>

<1> Chief problems contained in our religious education

<2> Concrete counterplans to such problems

A) Reconsideration to religion itself

B) Reconsideration to our image of death

C) How to save the religious phenomema from our commonsense

1) Reconsideration to our structure-map of consciousness

2) Introduction into the method of touching religious phenomena

3) Reconsideration to Scientism

4) Probability of spiritual science

<Epilogue>